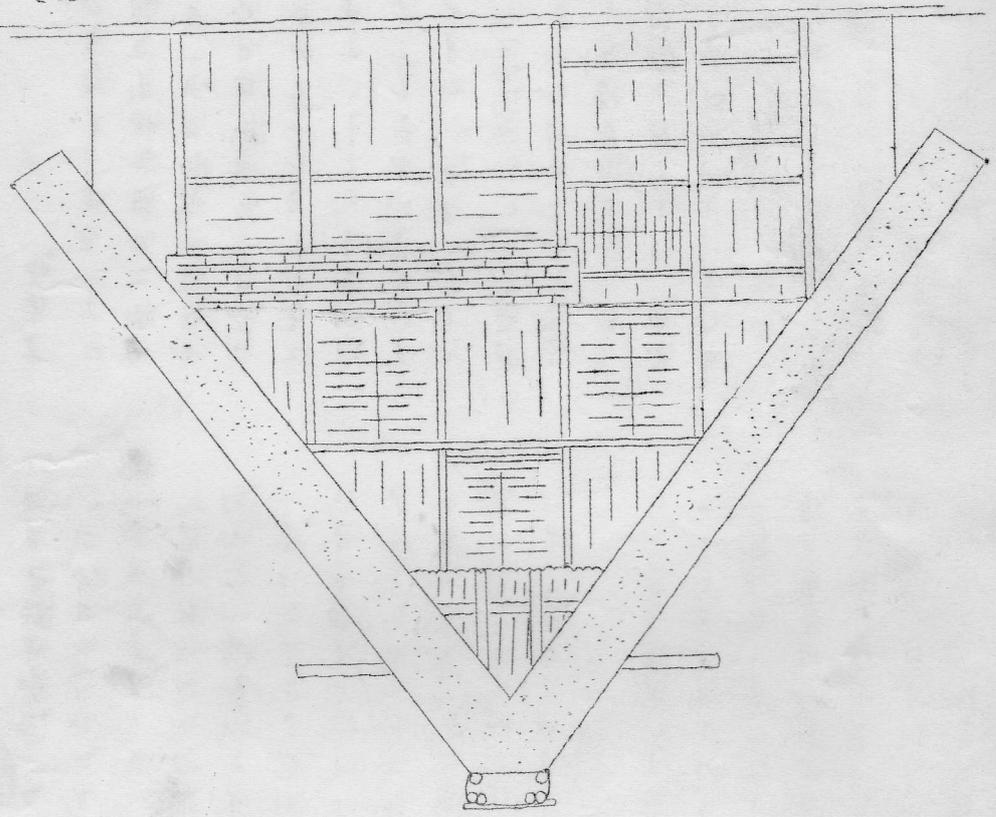


名古屋大学郷土研究会

(白川郷)



木乙号

① 木乙号



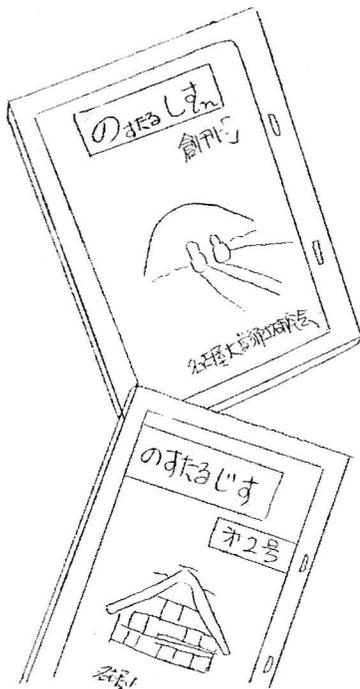
編集委員 序

「のすたるじす」オニ号が完成しました。本当に完成と言うべき程長い間でした。当初五月に発刊の計画が今日まで遅れた事は正しく理解されねばなりません。本来この様な種類の機関誌は研究活動と直接関係はありません。しかし機関誌が出ない時は大体において、研究活動もそんなに活発ではありません。事実五月以来見るべき活動は名大祭と夏合宿だけで、本来の研究活動は全くありませんでした。ですから、機関誌の発刊が活動の水準を表現するとも言えます。これからはもっと定期的に又、タイムリーに発刊できるように努めましょう。

又、機関誌について、クラブの様は機能集団にこの様なメインシャフト的な機関誌は必要なのだろうかという意見も耳にしますが、クラブにあっては単に機能集団の目的以外にも皆が合意すれば、その事項をほとんどんやっても良いと思えます。たゞこの機関誌の場合は目的以外の事において、

その機能が停止しているのに問題があるのだと思います。

ともかくも「のすたるじす」は郷土研究会の唯一の機関誌であり、現在でも部員の相互理解を深めるため、各部員の目頃知られざる面とか、あまり話さざりし事項とかを直接的に知る機会を与えているという点で十分に評価されるべきです。しかしそれと同時に以前に上げた様な問題も正しく見つけて郷土研究会が、そしてその中から一人一人が発展し、やがて大学時代の良き思い出となる様な機関誌「のすたるじす」に成長させ様ではありませんか。(山岸)



# 目次 (のすたるじす)

序 ---- (津坂)

編集委員序 ---- (山岸)

§ 今年度の活動について  
反省と計画 ---- (西川義)

§ 文 芸

郷土研究会私感	---	塚本政巳	(一年)
無題	---	高橋敏明	(一年)
ゆるま湯泉	---	寺本忠司	(一年)
生きまた題	---	伊藤明秀	(一年)
無題	---	杉浦秀敏	(一年)
《人物あれこれ》			
《人感これからの信冒》	---	梶浦博一	(二年)
《近江夜己年	---	西川義永	(二年)
徹自一漢	---	樋口清司	(三年)
	---	山岸章隆	(三年)
	---	津坂	(四年)

§ 実地踏査シリーズ(1)  
実地踏査見シ学旅行を終えて --- 西川 洋

§ 特別連載  
それまでの郷研(1) --- O.B.  
郷研の歴史 --- 松山 博氏

§ 先輩紹介

§ 会員名簿

補正

§ 文 芸

無題 ---- 井村正博 (一年)

我らの郷研 ---- 西川 洋 (一年)

反省の活動について

# 反省と詩画

## ②反省

まず簡単に現在(介月)までの活動をかえってみよう。

4月2日(6日) 春合宿(奈良と伊賀上野)

柳生街道

18と20日 説明会(学館)

22日 コソバ

5月3日 楠箕間踏査会

6日 名大祭 合宿(岬陽寮)

6月8日 名大祭 合宿(半僧坊)

10と30日 展示(教養部55番)

『楠箕間の戦い』

『名古屋城と名古屋人』

映画 『ふるさと』と『紀行』

8月25と29日 夏合宿(白川郷と高山)

『飛騨路』

9月16日 研究テーマ『徳川家康』に決定

10月18日 資料印刷・発行

21日 『家康にフッ』が一回発表

29日 松平町(松平郷)奥地踏査Ⅰ

12月2・3日 長篠・静岡 奥地踏査Ⅱ

今年の4月、新一年生6名を迎えて出発した私達のクラブは、はじめて名大祭に取り組むことになった。二回の合宿を間にはさみながら6月と名大祭の準備が進められ、『楠箕間の戦い』、『名古屋城』の2班にわかれて展示の完成を急いだ。展示が一日遅れたり、内容資金その他多くの問題点はあったが、ともかく皆んなの努力でどうにか成功した訳だが、この名大祭参加は、私たちが研究してきた(一部本のまる写し?)内容をまとめ、その成果を一般の人々に展示すると共に、より一層クラブ研究の内容を深め、サークル活動の基盤を固める上で大きな意義があったと思う。た

だ余りに名大築の展示が重要視され、他の日常的生活が無視されてはいけな

い。名大築後、新しい研究テーマ中世の人物史「前田利家」が決定されたが、何ら身体的な活動がなされず、ありま

◎これからの計画  
研究テーマ「徳川家康」

このテーマで、一応、来年の三月あたりまでやっていく詠だが、一応、

大きく分けると、

为二期 家康の出生以前〜桶狭間の戦い

为二期 秀吉の天下統一まで

为二期 関ヶ原の戦いまで

为二期 名古屋城築城〜大坂冬の陣・夏の陣

まで

のようになる。その一期ごとをさらに3〜4の時期に細分して、また、各時期に見合うように名旅行を計画している。

为二期 松平町・岡崎方面

为二期 長篠・静岡方面

为二期 小牧・長久手

为二期 関ヶ原

(補足 12月23日(土)コンパ予定)

テーマ「徳川家康」について、何を中心にして調べるかが決まっていないうが、そのためにも詳細な事柄や自分自身存りの問題・関心を個人研究で調べていく必要がある。



# 郷土研究私感

S I 塚本政巳



郷土——非常に感じのよいことばである。しかし現代の人間はこの郷土を忘れてしまっていると思われる。あまりにも身近にあるから見直そうとしないのではないか？ 実際僕も高校時代に、この種のクラブに入るまではこれと同じであった。そして三年間の活動を通じて少なくとも自分はこの郷土を忘れてはならないと思っている。自分の身の回りをもっと興味をもって眺めてみよう。そしてひまがあったら外へ出て自分の足で歩こう。何かあるはずだ。……こんなことを僕はある時に言ったことを覚えてける、いや絶対に忘れない。これが三年間で得た僕の持論なのだ。絶対に机上の研究で終ってはならない。ところでこの、

名大郷研は僕にとって非常に馴染みやすい気がする。この会でも問題になってくるようにだが「研究会としての研究はどの程度に、専らしていくか。そしてそこで自身の研究をいかにして生かしていくか？」自己満足にのみ陥ってはならない。このようなことを高校時代でもひまがある度に、友人と話し合ったが、はっきり結論は出なかつた。その続きとしてこの会では是非考えてみたいと思う。最後に今の僕の希望は研究論文を書きたいという事、そして今の僕の夢はいつかは自分で本を書いてみたいという事です。以上をもって僕の自己紹介をします。

# 無題

S I

井村正博

早いもので大学に入ってもう半年、この原稿の提出を求められてから半年後、今十月末になってやっと書き始める始末。

大学にも大部なれてきた。パナソニックは相当熟達したと思うが友達がよく麻雀をやっているのに僕は知らないものでこれから勉強しようと思う。郷土研究会は思っていたようにいろいろな点でよかった。ごまをするわけではないが立派な先輩を持って非常にうれしい。こまからは僕達もって改良してすばらしいサークルにしていきたい。この原稿は自己紹介のためのものだから以下自己紹介。

短気な割に鉦で不器用「これは自己批判ではなく真実」。趣味は魚つりと、ぶらり

と旅に出て寺とか風景を見ること。出身高校は三重県の名門<sup>(迷)</sup>四日市高校、志望は工学部化学工学化科。



# — 我らの郷研 —

—— 西川 洋

東の西高と並び名内へ迷ひ名古屋西高出身である。大学に対して入学以前から持つていたイメージと現実の大学とのギャップがあまりにもいちじるしりので、実際の所少々失望してしまつた。このような状態から抜け出る為にはサークルに入つておもしろい青春のエネルギーをぶつつけて大学生活をエンジョイしようと思つて自分に合つたサークルはないかと探つてみた所、小さい時から尸史特に日本史に強い関心を持つており時々旧跡名跡を尋ね歩くのが好きであり、たし幸ひにも名大に有名(?)な郷土研究会というサークルがあると知つて入つたわけである。五月初めに行なわれた新入生歓迎桶狭間踏査会は僕にとつて非常にすばらしい対験体験となつた。それは何故かという

と今まで漠然としか考えていなかつた尸史というものについて真剣な態度へ中途半端な興味本位的態度ではないので尸史を見る気持ちにさせたことである。これからの活動に真剣に取り組む姿勢が身についた感じがする。以上のような事からこの踏査会は、beautifullの一語につきると思う。さうにつけ加えることは、クラブ内外を問わず先輩と後輩との差へ年令・能力・技術が感じられないし、勝手気ままな言動を自由にも苦もなくできて非常に楽しいとして部員救へ約12(13名)が少なからず団結力が強くすばらしいサークルだと思ふ。最後に欠点をあげれば、それは学習会が充分に行われていないこととテーマが中途半端に終る傾向があることぐらいで、その他については何も言うことなしのすばらしいサークルである。

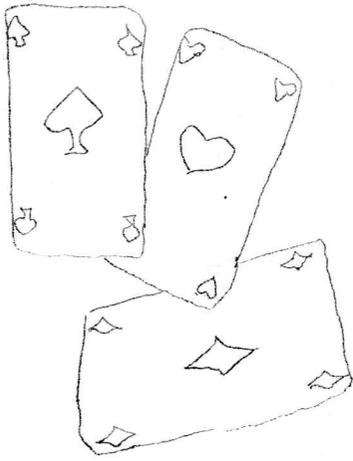
# 無題

高橋敏明

性は高橋、名は敏明。「高」がつくだけあって背は高い。「橋」のように骨格はしっかりしているようだ。けれど肉付きが悪い。「敏」なんて字はあるけれども敏しようさなんてでなく、体育ではいつも「2か3」の劣等生。我ながら感心する。「明」なんてあるが、その反対きつと誰かが「陰険さ」を見出し出すでしょう。しかし最近僕はこれでも、自己改造に乗り出してゐるんですよ。この郷研に入つたのもその策の一つである。僕にありてはどうも「名」は体を表わす「名」なんていう言葉は誤りで「姓」は体を表わす「名」は「反」体を表わす「名」と書き変えなければならぬようにある。出身高は愛知県立春日井

高等学校。最下18才。クラブ歴、中一、科学クラブ、中二、三、バスケットクラブ、高一、三生物クラブ、そして大一、郷土研究会、この他にもクラブではなすが団体に属したことはあり。「郷研」なんて聞くと「パスツール」を思い出してどうもいけな。我が（所有を表わす助詞）郷研に入つたのは、べつに対象の徳川家康に関心があるからでもなければ、郷研が素晴らしい成果を上げてゐるからなんて空想に近い理由からでもない。英礼、ちよつと舌大りに言い過ぎました。過去の人間よりも現在の生きた人間の方がよっぽど興味があるからです。大卒に入つてから六ヶ月、クラスの内だけの

行動範囲あるいは本の世界しか持たない自分の精神的狭さを感じるようになったからです。高校三年までは、クラブに卓球をほき過ぎるの為に高三になるまで予期もしなかつた文学部なんかへ入ることとなつたのである。まあざつとこんなところですが。新入りのくせにふやけたことを書きやあがってなんて思はないで下さい。これが今の僕の本心なんです。ですから最後に、僕の対象は生きてゐる人間です。どうぞよろしく。その為にできるだけ努力するつもりです。



## ——ぬるま湯温泉——

51 井本忠三

今、自分のことを書こうとすると、なかなか筆が進まない。だから、高校生活のことを書いて、私の性格の一面としようと思ふ。出身は、向陽高校であり、そこは名古屋の中心に位置します。向陽高校の特徴は、向陽生の間では、ぬるま湯温泉とか、向陽温泉とかいわれている。しかも体育祭ではそれをテーマにしたアークを作るクラスもある。人生において、中庸がだいじだと言われますが、向陽生は、中庸に徹しすぎる傾向があります。また、私も、向陽生の一員であり、ぬるま湯温泉にいたっている一人であるかもしれませぬ。だから、大学にはいった機会に、中庸にあまり徹しないように、積極的な行動をとるつもりです。

一生をかけたふるさとを

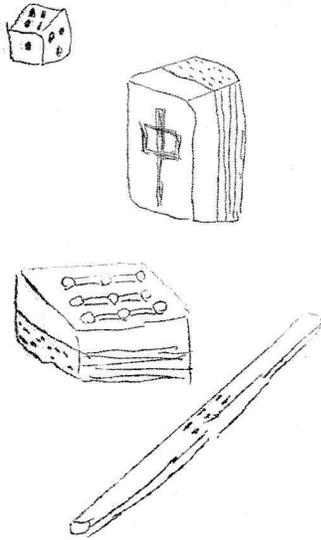
11 伊藤明徳

と思います。そして、それが、<sup>「</sup>郷研<sup>」</sup>に入った理由の一つであろう。

ワラジ歴は、中学時代は、柔道部に入った。名古屋帝の大会で優勝したときも

ある。だが、私は補欠で一試合に出ただけだった。その戦績も引き分け。

高一のときは、サッカー部に入った。ポジションは、レフイバックだった。ポジ  
じちからも、うまくなかった。



姓は伊藤、名は明徳。生まれは愛知県春日井市下平場町五四八、裏のたらいり中で、お母上の御体の中から生まれた時は、昭和二十四年一月一日、大関様の生まれた日である。だから、おれも、天下をねらってやろうかと思ってもみたが、今の世の中は、戦国の世ではなく、民主主義(デモクラシー)の世。武わでは名もなすこともできない。せめて羽田で暴れまわってみたところで、国家権力の前では牛と競争する蛙、やろうとせれるところが精一っぱいである。そこで、一転して、山田良政のよつに異国に出て、一旗上げてやろうか、さて中共け？ペトナムは？中近東は？南米は？、ほかとああせうか、おれは外国語がにがてだった。それ

に内ができていないのに外へ向かったところ  
で、砂上の楼閣、一日ももつまい。  
異国も丸りなら、文教政策でいこうか、  
文部大臣が通当かな、さて、神様のい  
うことには、おまえは脳内回転が悪い事  
を一度でも考えて見たことがあるか。そ  
れに、正月に生まれたのは香言ばかりで  
なく、阿保もいるし、痴かんもある。お  
おバカ、正月に生まれていかんという規  
則は、ごく世間にあつても、このゆしが  
そんなことも日本国はじまって以来、一  
一度として言ったことはない。だから、  
お前は香言に似ず、バカの方に似ている  
ことを忘れるな。二の स्वाタナク 何の二  
の神助、おれはおれだ、神なんか、  
おれには無関係だ。生きるのも、二の  
一秒一秒生きるという二のことも意味も来  
ゆるのは、二のおれなんだ。だが、  
お前の忠告だけは、なるほど、真実だ。

おれもいつも感じている。自分では命からぬ  
が自分の行動をふりかえつてみるようになるほど  
と思う。しかし、おれはおれだ。念願の香言  
の自己同化も捨て、海の真正中に居たこと  
れをおれ、孤独がおれをとりまく。心の深底  
から。

今は大学二年、なんとか学校の職員の手ち  
かりでえれてもらつたおれ。おれは何をや  
たらいいのかわらん。二の短い人生をいかに  
生きべきかろうか。ふるさとは生きることに  
何であるのか示唆してくれる。今までのふるさ  
とで生活し、死んだ人々は、みなふるさとの  
中に生きているとおれは信じる。だからおれ  
はその生き方を生きを知りたい。二のふるさと  
も一つ一つの結晶した生の働きを知ること  
によって。

無題

S1

杉浦秀敏

桜の花は散っても木は残る。そして次にくる春のために準備をする。短い美のたぬに。短い美のために長い準備をする。僕はこの精神を貫きぬいて一生を過したいと思う。一生準備しても花は咲かないかもしれないが、ところで百姓から天下を取った秀吉であるが、僕の名は秀敏。カタカナで書くと「ヨ」と「シ」の違いである。そして「ヨ」と「シ」では、五十音順でいくと「キ」と「敏」の違いであり、秀吉の方は「おみくじの吉」、つまり「運」がよくて秀吉の方であるが、僕の方は「敏」、つまり自分の力で秀吉より出るのである。この奥でいくと秀吉よりも大物になる可能性があると思う。

・津坂氏(正4年)

一見女に持てそうで持てない男。真はまじめだよ。詩の才有り。

・樋口部長(理)3年

数学の秀才。一見真面目そうで、心の中はどうかかわからない。

・山岸(理)3年

出たア！、女の子には、手を出してはふられてる。自称金沢の富農の生れ。

・梶浦(理)2年

バード佐竹に似て、女の子には持てる。(ペタン)

・西川(理)2年

将来の成長株。五円高、誠実そのもの。

・井村(理)1年

・坂本(理)1年

栄養不足。クンまじめ。公認どうぶ

・伊藤(理)1年

西にはめ、ぼう強し。

・寺本(理)1年

ドビヤ、彼の口ぐせ。

・杉浦(理)1年

本心のわからぬ男。

・西川(理)1年

自称真面目な男。

・高橋(理)1年

よくわからぬ男。

# 雑感

S2

梶浦博一

此頃急に肌寒くなってきた。毎朝6時30分に起されて朝食を詰め込んでへ食べるという表現ではとても理解されそうにない。家を出る。時計とにらめっこしながら駅へ急ぐ。電車と競争である。ちっとのことであるが毎日相も交らずスシ詰めである。乗る場所は不思議と決っているのでへ自分で意図した訳ではない。押し合う相手はどれい同じになる。長くつき合っているのだから、たまには挨拶しても不自然ではないと思うが、そんな挨拶はついで見かけないし、自分もしたことない。「袖ふれあらも……」と昔の人は言、だが、肩がぶつかろうと知らぬ顔。電車の中も森の中と同じ。まだ森の中の方が小鳥や花に会えるから楽しいにちがいない。名古屋まで30分、もったいな時間である。本でも読もうか

と思えど手も上がらない。まして何か暗記しようと思っても声を出すことができない。しかたがないので山と畑を鑑賞するか、頭の中で解くことのできる問題を考えるか、何も考えずにいるかである。山を登るといったのは鈴鹿山脈は実にすばらしいからである。一千mの低い山々ではあるが植物学的には宝庫だと言われている。山の姿は美しいとは言えないが山自体がすごく美しい感じられる。四季折々変化を見ることが出来る。秋のよく澄んだ朝、すばらしい自分の山のように感じられる。その時は何んだか楽しくなる。

山に登るのが好きになったのは高校生になつてからである。よく登る山は藤原岳である。毎年登っている。コースもほぼ同じである。飽きかたのいいが不思議である。高

山植物も少々ある。知ってゐるのはバイケイソウだけ、高山植物ではないがイカリ草、ヤマブキ、フキ、スミレ、リンドウ、クマガサ、カタクリなどがある。葎草であるドクダミ、イカリ草等々、おもしろい名にしてはジゴクノカマノフタという植物がある。裏道に多く御在所のように乱獲されてゐない。山からは伊勢湾が望まれる。遠くには志摩半島、知多半島が見える。四日市の方を眺めるとやはりかすんでゐた。毎朝電車の中では頭はかすんでゐる。こういう時に過去の事が急に思い出される。既幼稚園、富州原小学校に進んで富州原中学に昭和何年かに入學した。小生の一年前を樋口氏が歩りてゐた。大学まで歩調を合わせてゆくことになると思ひなかつた。幸か不幸か同じクラスになつたことはなく、入れ代わつたこともなかつた。中学時代は

バスケット

バスケットボールをやつてゐた。二年の時なんか朝から晩までである。七時頃始めて八時半に終り授業を受ける。疲れるのでよく眠る。三時半頃になるとさえてくる。それから又練習もつとも二ヶ月しか続かなかつた。午後だけの練習にした。ともかく西口市では優勝した。その後四高に入學する。そして何んとなく生物部に入る。それから山歩きにとりつかれる。植物グループだ、よので採集に行くのだが、植物と名のつくものはなんでも集めることにしてゐた。何か研究しなければならぬことになつてゐたので「クロレラ」について少々かじつてみた。クロレラについて少しふれてみよう。クロレラが維管束植物であることを知つてゐる人はまだ少ないようだ。単細胞植物性プランクトンである。条件次第ではすばらしい繁殖を示す。金魚を飼う時気づくと

思うが、水がすぐ緑色になる。これは、ミドリムシか、ワロレウ類である。類といふのはワロレウにも色々種類がありワロレウセネデスムス、ワロレウピレノイド等多くある。研究用には純粹のものが必要である。純粹培養を行うが、これは有名なコッホ博士の固形培養基を使うとできる。ワロレウはすべて淡水産である。10%の塩水なら十分増殖する。繁殖できようようになると思われ。PHは中性に近い弱酸性の方が良い。栄養源に富み有効なタンパク源であることは周知の通りである。微生物はこれから大いに利用されるにちがいない。人間が、発見した無機物よりか、と高能率に反応を進行させることのできるのが微生物である。この微生物を如何に利用し、かつ、培養するが、これからの化学であると思う。

魚や鳥の人工養飼したように神からの贈り物を大切に育てるべきである。顕微鏡で、ワロレウを見る。六百倍でやると見ることでできる大きさである。四個又は八個に分裂してゆく。まだ次々と分裂してゆく。結合を行うかどうかは知らない。おそらくないだろう。単細胞生物の中でも、とも下等な部類に属する由と思う。高等になれば生殖を行う。ミドリムシは数代分裂すると他のミドリムシと結合し原形質の交換を行う。他の物もこれに近い。生殖が行なわれないと、分裂の際の突然変異のみが、変化をもたらす。他に放射線の影響によるものもあるが、ともかく変異が少ない。そういう意味でワロレウはかなり安定な生物である。ワロレウは幸だと思ふ。人間みために相互にけんかしたり、殺しあつたりすることはないから。人間にとって人間が恐ろし

い。なおさら、クロレウに、て人間が恐ろしい。クロレウは人間の意志の外にはもはや存在できなくなっているから。微生物すべてがそうなっている。生命とは何んだらう。小生が生きているうちに答えを聞きたい。満員電車の中は人形が誇っているみたいだ。時々人間を見つけたときがある。奥にうれしい。こんな事を考えたりしているうちに名古屋につく。そして本山の坂道をただ黙々と登るのである。つまらないし、おもしろくもないし、あきがるのにやめるきにならないうのがふしぎである。



## それからの信昌

奥平信昌（一五五五—一六一五）、長篠城城主。初名は定昌、九八郎と称した。長篠の戦いに当りよく城を守り、織田・徳川連合軍を勝利へと導いた。その年（一五七五）天正三（八月）定昌は岐阜で信長に謁し、長篠の戦いの援助を謝した。信長はその武勇を賞し、編諱を与えて信昌と改めた。家康からは遠江に土地を与えられ、長篠城が非常に破壊されたので、天正四年新城に移った。のち遠州横須賀城を守り、武田征伐にも従ったが、一五八四（天正十二）年の小牧役には羽柴秀吉方の森長可を尾州羽黒に破って、首二〇〇余級を得た。一五八八（天正十六）年従五位下美作守に叙位、小田原征伐にも従い、九〇（天正十八）年八月家康関東入国に際し、上州高崎三万石の領主となり、関ヶ原役にも参加し戦後、京都の制法を掌った。のち美濃国田納十萬石に転封された。妻は家康の女亀姫。

# — 近江・若狭のこと —

L2 西川義永

今年の夏、8月16日から22日まで自転車旅行に出かけた。コースは大津―近江舞子―つるが―三方五湖―小浜―舞鶴―宮津―天橋立全長三〇五kmであり長い長いよう短かった。本来はもう一日かけて丹後半島を一周するつもりだったが、台風の為予定をくりあげた。この旅行で印象に残った自然の風景が二つある。一つは琵琶湖の湖水の青さ。夜、近江舞子のキャンプに泊って見た琵琶湖の月。丸くこうこうと輝き、波立つ湖水にきらきら光っていた。いにしへの近江の月もかくの如くならん、……。

もう一つは日本海の海の色。私は太平洋をよく知らない。だからその海の色がどんなであるかわからないが、蘇洞門（小浜）の岩近くは、澄んだ緑色。まるでさんご礁の

海（よく知ってる訳ではないが）に似ているように思えた。三方五湖の梅丈岳から見た日本海はコバルトだった。海の色は実にきれいだった。それとは別に、そろそろ重くたれさがあっている縮穂を道の両側に見ることができた。別に珍しいものではないが、特に注意を引いたとらものでもないが、今にして思えば自分に何かしら安心感を与えてくれたようだ。多少寺院について話すと、小浜市には多くの寺があり、国宝、重要文化財を多数保存している。何故、京都から一山もふた山も越えた若狭の一都市に寺院、仏像が多いかはこれからの探究にかすとして奈良、京都とは違ってスピークから流暢に説明されることなく、静かに観賞しうる趣きのある寺々である。

# 徹夜歩行記

理学部三年 樋口清司

前日の雨が上がり、十日夜の夜、松山さんと今池交差点で待ちあわせる。いろいろ都合があつてか、結局、僕と二人だけになる。喫茶「もらやま」で、山岸君もまじえてミルクで乾杯、一時間余の談合の後、山岸君のやさやかな見送りを受けて、一まず東山公園めざして歩きはじめる。東山モノレール駅前池のベンチで小休止。快適に夜の街、散歩、雑談でなんとなく二時まできた。オレンジ色の外灯がいやに印象的だ。ミカン一コ、千ヨコ少々をやる。まだ目的地きまらず。たまたまどこでもいいからあるところ。東山ドライブウェイへ。車は脇をぶつとぼしている。土曜日のせい、アベックがほとんど。

富士見台へ。名古屋が全部見わたせる夜の街、灯がきれい。どこか別の町へ来たようだ。その後、一度は、東山―豊田への道にでたが、また路地にはいり、行きどまり垣を乗り越えて無目的に歩いていると、淑徳校内へ迷い込んでいた。犬に追いだされ分譲地らしき所へ出る。赤土のデコボコ道を少し行くと、平和公園水銀灯の下に出た。約10分休んで歩く。足の調子がどうも重い。それに右足つけねのリンパ腺うれきところがいたい。引きつけられている感じだ。やはり平和公園にも、二人づれが多い。光が丘跡の団地を二三通つて、どこにあるのかわからないが、香流川を渡る。どうも瀬戸の方向へ向いているらしい。足の調子、快調ではないが、なんとなく進む。タワシーに出会うが全部空車。やっぱり市街(名古屋)から離れて歩いてけるらしい。東山から平和公園へたえず丘

陵を来る 名古屋の夜景が見えかゝれず  
る。そろそろ腹がすいてきた。パンでも  
買ってあげばよかったと少し後悔する  
1130 引山というバス停で少しの間休憩  
引山までは香流川を渡り 新屋敷 猪子  
石を目の前をぶつとぼすタクシーに悩ま  
せられてきた。二のバス停近くの食料店  
のおやじが奇妙な顔をして話しかけてく  
る。やっぱり僕らの行節が不思議らしい  
店を開けてもらってパンを購え ホッ  
とする。ワイスキーと千ヨコを口に入れ  
て初めて畑田を広げる。そろそろ暑くな  
ってきた。足は相愛らずリンパ腺あたり  
がフツフツとぬえているが、疲労感はない。寒さ  
を感じアノラックを着る。松山さんに提  
子を貸す。そろそろ人家もまだら。夜更  
の星は最高に澄みわたる。冬の星座。オ  
リオン座もろくに西の空にかたむ  
く。山でキャンピングの夜みたい。昨夜の雨  
が幸い。その雨あがり寒いが不幸だ。田  
んぼの中。黙々と歩く。瀬戸まで行こう  
という腹案とした目標がだんだん二人の  
心にはつきりしてくる。寒さに耐えかね  
て休憩。田んぼの中でたき火。パン一個  
を食べる。空腹を満すのに十分の暖  
かさ。定らぎがある。たき火をかこんで  
一時間。たき火と向っている体の反対側

は夜風が暑くないややす(1230) 足は快調  
頭も気も皆無。マジオはよく付いている。クク  
子の数も数減。快調な真夜歩行がはじまる  
瀬戸へ瀬戸へと。しばらくして矢田川提  
へ。疲労感もなく足もさびに苦痛を感じ  
てない。まだたむさると寒さが二た  
える。松山さん盛んに寒さを二倍す。僕は  
アノラックのお陰で平気。だんだん人家が  
ふえる。街村の形態。瀬戸物工場のカマを  
熱するボイラーの音らしい。徹夜で工場  
灯がついている。そんな景色がチラチラ  
バス停の「瀬戸本地」道路工事場の瀬戸市  
が瀬戸市に入ったことを知られている。大  
の遠味えに悩まされながらも瀬戸駅めがけ  
てテケテケ。気もわるくない。足は調子  
も頭初痛みを忘れている。左側に瀬戸市  
街地らしき灯の集りが絶えず見える。隠れて  
きた。畑田をみてもどの道もあるいている  
が確信がないなかな瀬戸市中心街へ出な  
い。あ、つと焦りみたいなのが出てくる。  
遠いなあという気持ち足が物憂い感じ。頭  
のぼりぐわいを象徴している。今の目標は  
とにかく夜明けの頃(始発時?)まで歩く  
ことだ。時計がいやに中々進んでい  
るよう感じる。まだ2時半だ。あと2時  
間半だ。腹をたてたり和めたり  
2330 北山農協会館で5分の小休止。やっぱ

川を走ると寒い。しかしまだまだ寝れな  
か。気にはならない。ふとももの裏側の筋  
肉が引っぱられていっている。松山さん  
working machine 論 無意識に一定のペース  
で歩く。東海銀行前の四つ角。やっぱ頼  
戸車へ着いた気が。まだ30分すぎた。この  
辺からバスが何かで帰る。気がする。  
が夜明けまで時間が有り過ぎる。3.20 頼  
戸駆着。とにかく頼戸駆まですぐ長く  
感じた。たった30分だが。しかしまだ意  
識は。かりしていっている。疲弊は月どん  
ど感でいていながら。多治見まで8km 道路  
標識が示している。よおし。多治見ま  
で行こう。あま。と自信はなにかさし  
て大乗心もいらなかつた。しかし3.30お  
からは意識は。うろうろとし。目を閉じ  
てた。無意識のうちには歩は進む。ぼんや  
りして。頼戸。頼戸物の町。陶土の  
土岐川。そんな状態で4時半からち時近  
くまで歩く。おそろく注意は最低。反射  
神経。感覚神経すべて休んでいた。である  
う。松山さんは車が通るたびに大きな声  
で注意してくれた。しかし足を動かす。二  
とは何んの抵抗もなかつた。まだ余命な  
事は。一さ。い行動する。か。か。く。う。だ。つ。た  
。眠。む。わ。つ。た。ん。だ。な。あ。考。え。て。み。れ。は。一。番  
理想的(最小)のエネルギーで歩いている。

たんだらう。頼戸車は水銀灯の町とい  
つ。感じ。陶土でやわらかい曲線を猫がく  
土岐川の川原にその灯が調和していた。  
そんな風景がよけい僕が夢見心地に輪を  
かけた。かもしれな。頼戸車を出てと  
あえず中品野を目標とする。その辺の葉  
子をおまわりを憶えている。とにかく3.00  
2.30の間は夢の世界だ。足は重かつた。  
ふくらむ。ぎとふとももの筋肉が引きつ  
て。起。こ。し。て。い。る。み。た。い。コ。チ。ン。コ。チ。ン。に  
か。た。く。な。つ。て。い。た。が。さ。し。て。苦。痛。は。な。り  
な。れ。ま。り。も。す。べ。て。か。も。つ。ろ。う。つ。と。し。て。い。た。  
5時すぎ品野と下半田(シモハダ)川の中間  
地点で休けい。品野の町で水を汲み。夕  
木をひたさ。ゆ。た。に。咲。え。ら。れ。て。歩。い。て。い。た。  
二。つ。を。覚。え。て。い。る。外。を。浴。び。2。回。目。の。大。休  
止。夕。木。を。燃。や。し。て。用。意。した。ラ。イ。ナ。ン  
を。食。べ。る。そのうちには体も頭も目がさめ  
る。夜明けだ。熟睡した後のさわやか  
な。夜。明。け。そんな感じ。で。ラ。イ。ナ。ン。を。食。べ。る。  
小鳥のさえずりも聞えてきた。出発時に  
はず。か。り。正。常。な。状。態。再。び。快。調。な。気。分  
で。歩。き。は。じ。め。る。歌。も。と。び。だ。し。掃。気。に  
愛。知。岐。阜。の。景。境。を。二。三。る。ま。わ。り。の。山  
な。み。は。木。曾。路。を。お。も。わ。せ。る。川。が。右。手。に  
流。れ。朝。の。ク。ラ。イ。マ。ツ。ク。ス。レ。か。レ。下。半  
田。川。を。す。ぎ。て。平。倉。を。通。過。した。頃。から。再

びあの物愛い、葉巻とした状態が變つて  
 来た。眼の氣と板帯とをくつさとして  
 べてが静止状態へ向つてゐる。しかして今  
 度は足の状態がそのもうろうとして意識  
 と輪をかけた。それ二足面足の輪肉すべ  
 てかコチンコチンに束結してしまつたよ  
 うに。意識して動かさないと動かない  
 重い足。道路と股の間で強いドネが働  
 いてゐる。縮めつけられてゐるような氣  
 持だ。ただ多治見へあと5kmとゆう標識  
 ちうすく着くまで5kmの氣合。氣だけけが  
 駈まで歩かせた。瀬戸市内でもうろうと  
 した意識はなんとなく、11月の間に無  
 意識になり進んでいった状態だ。今の  
 多治見駅に近づくにつれて變つてきた無  
 意識状態は強引な力で引っぱり込まれて  
 いくような感じだ。足の重さ・板帯も敷  
 しなつた。ただ足だけでなく身体全体が  
 重んやりにし、ほうと、もうろうとして  
 いた。氣の意識だけを歩いてゐた。無意  
 識で動いていた足は今や一歩一歩意識し  
 て動かさねばならぬ。ちうどまるど足か  
 最全体がしびれてくる。再び歩きはじめ  
 るのは大仕事だ。多治見駅には9時につ  
 いた。ちうど出発して1時間半、駅  
 で小休止。駅前の喫茶店でミルクをのん  
 で、お茶の名産馬車行きて帰る。車中はも

ちろんぐっすり。近鉄で富州原へは小頃  
 着。家まで少レずつゆつくり歩いて帰つ  
 てきた。足を上げ下げするの自由に出  
 来ない状態。しかして全体をふりかえつ  
 てもさして苦痛だとか、もういやだとか  
 いう嫌悪感も少レもなり。むしろ徹夜で  
 歩き通した痛足感がほんの少レだけある  
 のみだ。要するに感想はなにもない。そ  
 う言つたほうは正しい。祭りと征服感  
 を強く感じたとは義理にもいえないがた  
 だなんとなく祭りにようなられよう  
 存自信がほんの少レ。ほんとうにほんの  
 少レだけある。二二に書いたほどの苦痛  
 とかあせり、苦痛も実際はそんなに感じ  
 てないかもしれないがあのすべてが漠然  
 としてただぼんやり足だけ動かして  
 状態がいやに印象的なのは何故だろう  
 今でも少レ開いたまぶたの間に差れ込ん  
 でくる瀬戸市の水銀灯と陶土の土岐川の  
 流れが秀んでくる。暗闇の中にすべてが  
 ぼんやり着るしまい、黒々とした背景  
 の中に、ただぼんやりと、あの状態が何  
 も表わしてゐるのか知らない。わかんな  
 い。田んぼの中や夜空とぶつとばすたく  
 シーと瀬戸市の町並の水銀灯とが二の流  
 のランボルか？。行程約4km、歩行時間  
 85分、12時間45分、休憩・合計2時間45分  
 (一九六七・三・一三記)

自己紹介

理学部「3年」 樋口清司

生まれた時から四日市の片田舎漁村  
 富田一色に育つ。家から球打ち際までわ  
 ずか300m。台風となやませられながらも  
 海と親しみのびのびと野性的に育つ。最  
 近は工場用地として埋たてられスモッグ  
 にも時々なやまされて世にも不思議な人  
 物と化する。泳ぐ場を失なつて最近はお  
 ぼろ野原を鈴鹿山系を歩きまわつて  
 いる。大学で何でもやつてやろうとする主義  
 に大りに賛成だが足もとをすくわれてた  
 だ表面的な活動にふりまわされ自分の自  
 命をみるどころか心配。最近では自信喪  
 失気味でもっぱら趣味(?)の数学に興味を  
 集中すべく努力している。やっぱり大学  
 は学園の場である。学問を中心に動かね  
 ば大学生として疑問だと考える。まず学  
 究に全力を注ぎたい。その上でサーク  
 ルのよさを本当に理解すべきだと思  
 う。ただ勉強がいかにがしろにされて  
 いるのか。サークルの活動に対して消極的は存  
 在。それだけ回復してみたい。



T.T.

# 一年の思い出

経済学部3年 山岸章

私の大学一年はある意味では一番考えもし、又一番勉強もした時期であつた様に思われる。特にそのうちで何といつても政治に対する関心が強く引き起こされたのはこの時期である事が何よりも私には強い人格への影響となつてゐる。

大学の入学の時すでに手続きに来たときホールの入口である人に赤旗の講記をすすめられてこまづてしまつた。それまで赤旗はあまり好ましくないのであり赤旗なんてアカが読むものだと言われていたからどうだぞうだと思つていた。何にしてもすいすいとゆきたかゝたのがそのころの考である。授業が始まり時々クラスで討論会が行なわれた。そんな

思ひきはいつも反対意見に立つて常に他人の意見を出すことに満足してゐた。しかし他人により僕の意見が後向きであり、もつと前向きになる必要があると注意されると何かどきりとするものを感じたものだった。一方 学校以外では、当時姉の家を下宿してゐて散歩と読書以外にこれと云つてする事がなかつた。そしてその頃読んだいくつかの本の中に太宰の『人間失格』があつてゐた。私は主人公が人生全般に懐疑的であり学生時代に運動に入つても、その秘密主義を非常にニヒルに批判し、それらに何々の価値を置いてゐない生き方に何か引かれるものを感じた。又運動の秘密主義それ自体にも無限の神秘が含まれてゐる様な興味を持つたものだった。

学校ではオニレズツ学生運動に対して主体的というよりもむしろ従属的ヒクラスが全体で行なうから参加するといふ態度で加

わって行った。最初のデモは名大署と曰  
津にアリのての全学ストのおとの夕方から  
のものであった。コースはアナリカ領事  
館から自民党県連、そして矢場町までの  
ものであった。アナリカ領事館の前では  
機動隊がずらりと並んでゐた。その端で  
私服の警察官がどミリを学生の方に向け  
て一生懸命叫び立ててゐた。機動隊の一人一  
人の顔は全く学生を無視する様な  
ものだった。県連の前では学生を通さぬ  
様に二二にも機動隊が並んでゐた。何ら  
機動隊に私的に反感がないのだが感情的  
生理的な嫌悪を感じる。感情が高ぶり緊  
張する。同時にデモでは、見たこともな  
い人と気軽に手を組み声を合わせられる  
のも何か不思議なものだ。その日は後で  
雨が降って来た。僕は傘を持っていな

ったので学生服がずぶぬれになった。  
夏休みに入る頃に柴田の「それどわれら  
が日々を読んだ。これは夏休みに読書会を  
やるうという事になったのでいそいでかり  
てきて読んだ本である。しかし読んでみて  
後に頭にずしんときた。その頃は学生運動  
について一番考えていた時でありその本に  
はほぼ同じ様な人々の生活や意見が出てい  
たからだった。特に私は主人公の友人が体  
験したという安孫の表現が生々しく緊張感  
を持って感じられた。自分の今の立場や意  
見、社会の状況等と本の中の主人公たちの  
生き方を考えていたら朝になった。そうし  
て夏休みが終わるとすぐ試験が来てクイズ  
試験等も一時中止の状況になった。

試験休みに私は京都人高校時代の学友を  
訪ねる4日の旅行をした。丁度そのころ新

聞にも日韓がさめがれ朝日ジャーナルに  
日韓の特集号が出た。京都からの帰途、  
それをキに取りすこし読んで見て今ま  
での自分の考えの浅さが反省された。  
特に朝鮮人の地位に関する問題は強く私  
をとらえた。そこには在日朝鮮人による  
力強い感動的な書きがのっていた。私の  
小さい頃の朝鮮人に対する態度等と比較  
して彼らはあんな場合にはこの様に見える  
ていたのかと目頭が熱くなる思いだった。  
その他に單亭面やベトナムとの関係等と  
ついて述べてあった。それらを一気に読  
んで今までの考えが一変が通った様に  
思われた。そうだてきまだけの事はしよ  
うその時来べした。

## 漢詩

工学部年

津坂峯隆

### 遊於白川

来宿飛驒山中寺  
重山月滿松暑氣  
微風尋合掌茅屋  
老師全將語客意

本人が説明をするのも変であるが、誤解を  
受けてもつまらないから、つけ加えようと思  
う。

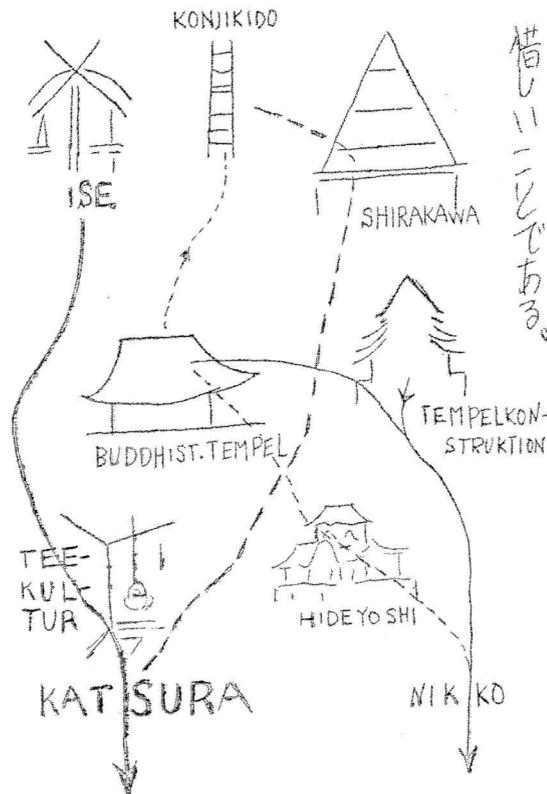
漢詩の詩形は、古詩と近代詩の二つに大別  
され、どちらも脚韻を踏まねばならず、近代  
詩はその上に、句の中の韻律の形、つまり平  
仄の配置に定型がある。二の平声、仄声とい  
うのは、漢字も中国語で発音した際の抑揚で

その配置を譲ってはならない。右に掲げた詩は近体詩の七言絶句のもりである。けれど、残念ながら平仄を全然知らないから、出題目にならべてある。ただ脚韻だけは踏んである。

内容は白川村を訪れた時のもので、似たような出来事があったが、事実ではない。無論、事実を詠んだだけでは面白くないばかりでなく、漢詩の要求する思索の結果とあらわすことができなくなる。その点を組み取って、ただこればかりで満足である。

わ一句は夏目漱石の詩に「白米宿山中 寺正」という句があるので、それを真似た。わ二句の「重山日満山」は月が遠く重なり合った山々に光を投げ掛けている様子を表現したつもりで、経験のある人も多いだろう。わ四句の「客正」は旅人という二つで、無論、人生に於ける旅人の意味である。

ある。白川村は、実にひっそりして、乗り物で訪れるにはふさわしくないのである。あんな見事な人の胸に一種独特の趣を起させた群立する合掌造りの家が、年々歳々減っていくのは惜しいことである。



アルーノ・タウト  
「日本美の再発見」

奥地見学旅行松平を終えて

しー 西川洋

後期にスッて我々のクラブも新レリ取組みの家康につりての研究も順調にスタートして先日、すばらしい秋晴れの一日、岡崎市の東北にある松平へとクラブ員数名(全員参加できなかつたのは残念)で出発した。岡崎からバスで約九十分で下車し、そこで今日のコースを定める(少敷のため)を命令で決定したを終えて、まず大給城跡へと向かった。途中の路ばたに、枝もたわわになつていゝワキに目をやりながら、ガマンしていったが、とうとうガマンしきれず、遂に全員一致団結して、ワキをもぎとつてたべながら、一時間ぐらいで大給城跡についた。ここは始め長坂灯え助の居城と伝わり、志仁文明の際岩津に在つた松平信

光が時の城主長坂新左衛門を討つてこれを陥し後に信光の後、乗元の居城となつた。及び大給松平氏の始祖であつて、永正三年(1516)二代乗正によつて大いに修築されたが四代親乗は同族の竜脚城主松平乗騎と戦つて天正三年(1575)西尾に走つたが、城はその節灰じんしたまま現在に至つた。頂上の広さ東西50m南北70m壕を割り、石垣きを築き、岩に穴をうかつて柱を建て更に天然の巨岩絶壁を利用した今も大手の辺りの礎を残している。この東方100mには、松平乗元の墓があり、石門に徳川の葵のマークをつけ、デラックスマン石墓であつた。その後松平へと急いだが仲々道が複雑で要戦苦闘すること一時間やつと松平に着いた時はほつとした感じがした。松平では、まず、松平初代親氏の家館跡とわづらわっている。松平神社に行つた。現代でも家館の回りに木を一杯にたえた堀をめぐらしていたのが、印象的であつた。それから200m行つたところに高月院という寺を見た。ここには徳川家三

代り墓やその他の貴重な文化財が保管されて  
 置けることと期待していたのだが、  
 ありにくく任取が居なくて残念であった。  
 その後松平城跡へ行つたが、小高い  
 丘の上にあつてそこから景色は何とも  
 すばらしく名古屋・豊田方面もかすかに  
 見渡すことができた。この城は、普通は  
 任取でなく夜になると見晴り役の侍  
 が夜襲となえて警戒をした場所に使わ  
 れていたらしい。現代化されてはいない。  
 この地に立っているとふとさこうからい  
 かめしい顔つまとして武器を持った侍が  
 近づいてくるような錯覚を感じるほどあ  
 たりは静かで戦力の乱世期にもどいたよ  
 うな気がして気持ち悪くなった。そうこ  
 うしているうちにハット気について、あた  
 りを見まわるともううす暗く電車の人が  
 なつていた。(10月29日旅行実施)



特別連載

## それまでの郷研

O.B 松山博

名古屋大学郷土研究会の歴史を語るに当ってその母体たる中部学生バスハイクサークルを看過する訳にはゆかない。名古屋大学郷土研究会は中部学生バスハイクサークルの活動の欠点を是正し、更に一層の発展を志す者達が、最初はバスハイクサークルと並列して、後にはそれから完全に独立的な存在として創り上げたものである。しかしバスハイクサークルの根本精神は依然として名古屋大学郷土研究会にうけつがれているといつてもよいと思う。

そこでまず郷土研究会の歴史的發展の第一歩としてのバスハイクサークルの形態及びそれが志向する精神的方向についてのべたいと思う。

バスハイクサークルの目的はその会則第二章第三条に明確に示されている。即ち、本会は未知の世界への若人の瞳を實現せしめ、実践的体験的に風光・地理・民俗・歴史・文化・産

業等を認識把握する事及び各大学相互の交流・親睦に貢献する事を目的とする。とある。これは、ほとんど改正の余地がない程明確で立派な目的であり、あらゆる活動の出発点であった。しかし後述する様にここに意外なおとし穴がひそむのである。しかしここではくわしくはのべない事にしておく。ただ、ここではバスハイクサークルの目的とする研究が中部地方に限られるのは、要するにバスで日帰りの範囲内にあるという地理的制限によるのに対し、名古屋大学郷土研究会が対象地域を中部地方（特に愛知県近辺）に限定するのは、そこで我われが生れ、あるいは現在生きていっているという郷土意識によるに外ならないという事だけそのべておく。次にバスハイクサークルの具体的形態及び活動について一寸のべてみよう。バスハイクサークルは中部地方諸大学の上に成り立つ連盟体組織であつて、その最高決議機関は各校より選出された委員よりなる委員会である。活動内容につい

これは才三章才四条に、本会は前条の目的を達成する為次の活動を行う。

- 一、主として観光貸切バスによる観光研究旅行
- 一、前項に関する資料の蒐集と発行
- 一、会報及び機関紙の発行
- 一、他の学生団体との連携協力及び相互援助
- 一、その他本会の目的の達成に必要なと認められる活動

とするされてある。

勿論最初の項目が最も主たる行事である事は、いふまでもない。ここでもつけ加えなければならぬ事がある。即ち郷土研究会においては、できる限り交通機関を利用せず、自らの手足・目・耳・体・心でその土地に融れあうという事、又才二項目についても単に事前の予備知識としてだけでなく、事後的な具体的成果の確保としてかなりの労力を注ぐという事実である。

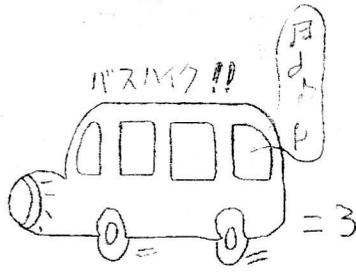
以上で大体バスハイクサークルのあらましについてはおわかつてもらえたと思うから、次にその長所短所についてのべてみたい。まず長所をあげてみると、種々の学校が集まっています互に

刺激しあう事により、研究における分業の利益も、各校毎の特色も出す事ができるといふことである。これはE.S.A等連盟団体組織特有の、又その成立に要する必要条件ともいふべき長所である。

短所としては、表面的には恒常的活動が極めて少なかった事。根本的には発展的意欲のある者とそうでない者との間の、理想をうたう会則と現実の諸条件もしくはその下における学生との間のギャップが余りにも大きく、負担が特定の人達にかかりやすく従って会員同志の考えの差がうめらぬ位大きなものであった事。本来自然発生的な無理に作り出す事のできぬ人間のつなかりというものをクラブに求める余り、それをクラブ活動における自己目的目的を暗黙の内に規定し、クラブ活動がいわゆる男女交際の媒材として使用された事、ものを学び取るうという雰囲気をかもし出すには余りにも多種の人間が集まりすぎていたといふ事などがあげられよう。

かかる発展的分裂の必然的要素を抱いたまま  
 我々バスハイクサークル名古屋大学支部は学内  
 においては名古屋大学郷工研究会という別称を  
 もつ事になった。即ちバスハイクサークルにえ  
 られなかつたものをそれに類似し別種のもので  
 補おうとする為二本建組織を造ろうと試みたの  
 である。しかしこの様な形態を維持してゆく事  
 は結果的には無理だったのであろうか新入部員  
 の思想的転向(バスハイクからの)が毎年続きつい  
 にこの二面的状態を繰り返す事ができなくなつて  
 しまったのである。そしてここに郷工研究会と  
 しての新たなる局面が開かれることになるので  
 ある。

一ツブク一



現実はボロイ!!  
 ~本当研究とはね~

## 先輩!!

○高島英明氏 40年卒業(工学部)

千葉県市原市山木四四の四

宇部興産 山木寮

我が郷研の父ともいうべき先輩。将来郷研が名大の否、日本地理歴史学会の主流になつた暁には豊田講堂前に先輩の銅像が出ることであろう。

おっとりがまえた氏の容貌は理論肌ではあるが冷たさを感じさせない。在学中にこのサークルの精神を確立され、卒業後も幾度か合宿等で我々に幾度も与えてくれた忠告、動かしは力強く思い起される。

現在 千葉に在任で我が部員が容易に氏のおしかりを受けられぬのは残念である。

○鈴木 弘氏 42年卒業(教育学部)

学生時代は勉強と一に熱中し下宿で本を読んでいたけれど、喫茶店に。みるからに女性の母性本能をくすぐるような容貌は我ら

後輩のあこがれの的であつた。

今や、中学生の理想の人たらんと教育活動に専念なさつていゝ。かつて全国女子大連合協会会長候補のものも、ぼらのうわさであつた。氏の下宿は時として我が郷村の合宿所と化し、夜明前まで氏の人生論に感服させられた。

○保坂英雄氏 42年卒業 (経済学部)

名古屋市中区西川端町九の三

松山氏とかかくうわさのあつた人(ドン平党の教祖争ひ)。ゴン平とは某屋台の名称。

現在尾州木材の若旦那で、藤村と血縁が大いに文学の才能を期待されてゐる。在学中、それを強く感じさせられたのは、先輩の頭がい骨が馬鬃にあつた藤村の青年時代のものに全くそっくりだつた時である。又氏は気象學に通じ、常にソコで野外活動にありては、氏の予報のもとに降られることは一度もなかつたとか。コソハの夜はよく氏の邸宅に招かれ、ジャラジャラとおそわつたのも後輩として光榮であつた。

○松山 博氏 42年卒業 (経済学部)

名古屋市中区昭和己丸屋町五の六四

未来の名鉄を背負う中部商界の大物。在学中は一人で東京へ大隈園を歩き通し、その根柢は大松氏も見直らたとか。卒業成績は抜群で勉強の合間にもオバQ、オソ松君をこよなく愛し女性を受する暇がなかつたという先輩。容姿はダンラに首こなしたブレザー姿、キリリとしまつた学生服はまことに印象的であつた。現在名鉄百貨店和装課寝具売り場で、油を売つてゐる。後輩の訪問を喜んで受け入れてくれます。「カゲリ声いぬく」大りにたかり加ひあり。

○刑法二百三十条

公然事案ヲ摘示シ人ノ名誉ヲ毀損シタル者ハソノ罪定 有無ヲ問ハズ三年以下ノ懲役若クハ禁固又ハ五万円以下ノ罰金ニ処ス。



# 昭和42年度名古屋大学郷土研究会 会員名簿・住所録

## ●4年生

法学部 片山 勝治 愛知県常滑市久米字荒子47  
工学部 津坂 峯隆 南区四条町4の4 (691) 1966

## ●3年生

経済学部 山岸 章 办郡郡基日寺町西今宿 (飛騨市)  
光和利子 (海部局 0560) 44-4118  
経済学部 鈴木 克祝 昭和区南分町4の54 (川口町)  
理学部 樋口 清司 四日市市富田一色町2-12  
(四日市 65-4729)

## ●2年生

L2.14 東 浦 晃 徳 昭 和 区 宮 東 町 304-3 (大橋5)  
L2.32 西 川 義 永 港 区 港 栄 町 7-57 (661) 2723  
L2.34 諸 戸 尚 視 四 日 市 市 富 田 1-8-3  
L2.33 鈴 木 政 実 四 日 市 市 大 学 茂 福 1808  
S2.15 梶 浦 博 一 四 日 市 市 富 州 原 町 8-12  
(四日市 65-0547)

## ●1年生

L1.11 伊 藤 明 徳 春 日 井 市 下 市 場 町 548  
L1.14 西 川 洋 一 宮 市 時 之 島 二 本 松 西 38  
L1.14 高 橋 敏 明 春 日 井 市 桃 山 町 5225  
○1.15 高 井 村 正 博 四 日 市 市 東 富 田 町 28-30  
S1.32 井 本 忠 司 昭 和 区 台 余 町 6-31  
S1.51 塚 本 政 巳 北 区 名 城 町 2-9  
S1.53 杉 浦 秀 敏 碧 海 郡 高 浜 町 高 取 小 林 2-9

## ▲帰省地

山岸 東 浦 石 川 県 石 川 郡 鶴 来 町 月 橋 118  
石 川 県 羽 咋 市 押 水 町 宿

のすだるじす 第2号

発行：名古屋大学郷土研究会

責任者：山岸 章

編集者：西川洋・寺本忠司

(非売品につき平販いたしません)

発行日：昭和42年12月9日

樋口清司